琉球大学学術リポジトリ

王子製紙株式會社 樺太分社案内 大正十四年七月

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2018-04-16
	キーワード (Ja): 矢内原忠雄
	キーワード (En): Yanaihara Tadao
	作成者: -
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/38424

矢内原忠雄文庫

史　料　名	王子製紙株式會社 樺太分社案内 大正十四年七月
封筒番号	427
原文所所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 18 日
撮　影　者	富士写真フイルム　株式会社
備　　考	

矢内原忠雄文庫

封筒番号： 427

史料名	王子製紙株式會社 樺太分社案内 大正十四年七月
資料形態	菊判
枚　数	32
頁　数	64
縦（cm）	
横（cm）	
厚さ(cm)	
書誌的事項	樺太 今泉分類記号： P

王子製紙
株式會社 樺太分社案内

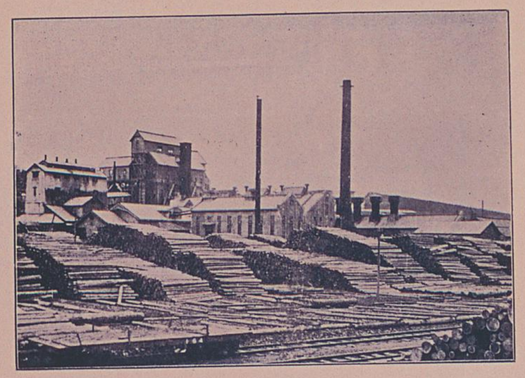
1/12

王子製紙
株式會社

樺太分社案内

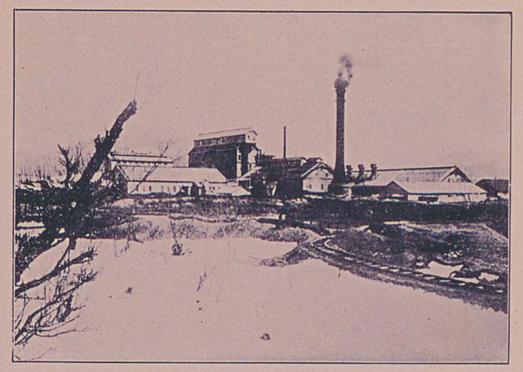
王子製紙
株式會社

樺太分社案内



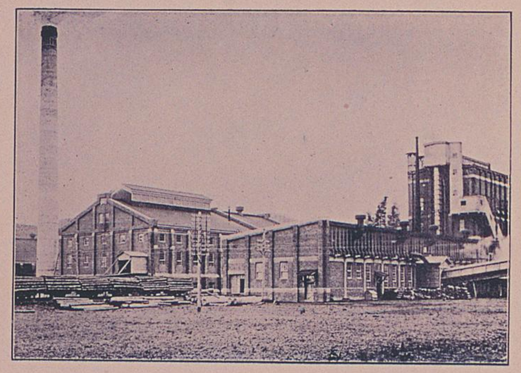
樺太分社大泊工場

本工場は大正三年に建設せられ本邦に於ける化學的パルプ工場の嚆矢なり年額パルプ一萬二千噸を製造す



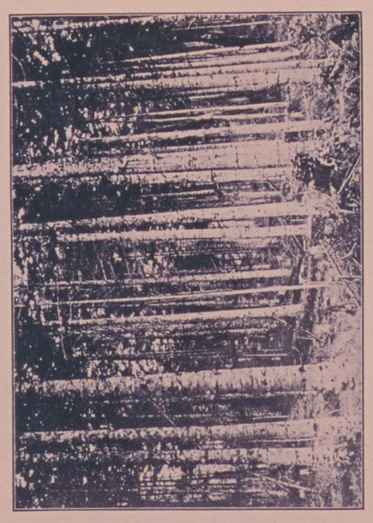
樺太分社豐原工場

大正六年より操業を開始し年額パルプ二萬二千噸包紙五百五十萬听を製造す。尙目下パルプ年額一萬三千噸工場增設工事中なり



樺太分社野田工場

大正十一年操業を開始し大泊豊原兩工場の長所を採り最新の理想的パルプ工場なり年額パルプ一萬五千噸を製造す



樺太森林の林相

樹種は多くは蝦夷松
椴松なり。元來樺太
森林は細小木多く一
般用材よりもパルプ
原料材として適せり
これ同島にパルプ業
盛なる主因なり

原料材の流送狀況

樺太に於ける原料材の流送は總て管流なり、寫眞は同島西海岸愛宕沸川に於ける當社野田工場原料材の流送狀況にして、本材の殺到せる光景は實に一大壯觀なり

留多加川の流送狀況

留多加川に於ける木材の流送狀況にして同所に流送せられたる木材は一旦集積せられ、更に所要地に發送せらる

目次

沿革
各工場の概況
本社及分社役員

王子製紙株式會社

樺太分社案內

沿革

我王子製紙株式會社は洋紙製造の目的を以て明治五年に創立せられ本邦最古の會社なり。當初、我社の資本金は僅に十五萬圓にして渺たる一王子工場を有するに過ぎざりしが、爾來星霜經來つて茲に五十有餘年、幸にして社運歲と共に隆盛に赴き、現在資本金六千百萬圓に垂んとし、工場は全國に亘

りて散在し其の數十三の多きに達し、生產高亦年額紙類三億五千餘萬听「パルプ」六萬七千餘噸の抄造を見、眞に本邦製紙界の先驅者たるのみならず現時に於ける第一人者として推稱せられ、絕えず本邦文化の發展と終始し貢獻する所あるは顧みて轉た今昔の感に堪へざる也。

而して樺太分社の濫觴は明治の末期大正の初頭の頃に屬す蓋し邦領樺太の管理が軍政より民政に移り初代の長官平岡定太郎氏就任せらるるや樺太の開拓は主として林業に依るの外なしとの意見を持せられ、樺太材の利用に就て當時三井物產株式會社木材部長たりし當社現社長藤原銀次郎氏に懇囑する所あり、依つて同氏は樺太に渡り親しく同島森林を調査し、

歸來これが利用の方策として「パルプ」工業の創始を提唱し、亞硫酸「パルプ」工場の設立を企畫しこれが建設を三井合名會社に慫慂せり。當時、亞硫酸「パルプ」は一に外國品の輸入に係り爲に支拂ふ金額も亦巨額に上り、「パルプ」の自給自足問題は我國家經濟上實に重大なる關係ありしのみならず時恰も國論は輸入防遏國產奬勵の產業政策を高調するの時期なりしを以て、三井合名會社に於ては國家的事業を開拓するといふ見地より藤原氏の建策に基き「パルプ」事業に就き愼重に調査することとなり調査員として當社現常務取締役高田直屹同小笠原菊次郎三井合名會社山林課長柴田榮吉の三氏を瑞典諾威兩國に派遣せり。高田氏は主として技術關係を、小笠原氏は經濟關係を柴

田氏は山林關係を調査し十分に研究したる後三井合名會社に於ては愈百萬圓の資金を投じ試驗的に「パルプ」工場を大泊に建設することに決定し、樺太紙料工場創立委員なるもの設けられたり。

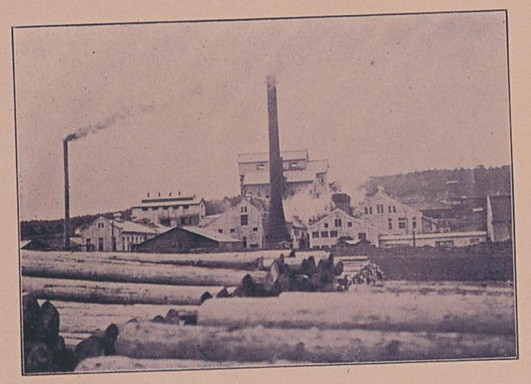
大正二年三月の交より工場建設に着手し大正三年十一月工事竣成十二月より操業を開始せり。これ卽ち元の三井樺太紙料工場にして現在の大泊工場なるが、本工場は實に吾國に於ける化學的「パルプ」工場の嚆矢なりとす。

大正四年七月三井合名會社の經營に係る前記紙料工場を當社にて繼承しこれを大泊工場と改稱せり。

歐洲戰爭勃發以來「パルプ」の輸入殆んど杜絶し我大泊工場の

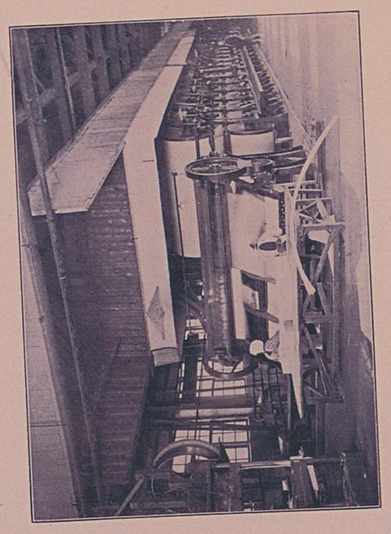
製品のみを以てしては到底其の需要に應ずる能はざりしに依り更に豐原町に「パルプ」工場の新設を計畫し大正五年春融雪後工場建設に着手し非常なる努力を以て工事を速成し大正六年一月より操業を開始せり。これ現在の豐原工場なり。

大正八年四月樺太西海岸の森林を利用するの目的を以て野田町に紙料工場の建設に着手し、十年十二月工事完成十一年二月より操業を開始せり。これ即ち野田工場にして本工場は大泊豐原兩工場の長所を採りて建設せられ眞に理想的の「パルプ」工場なり。



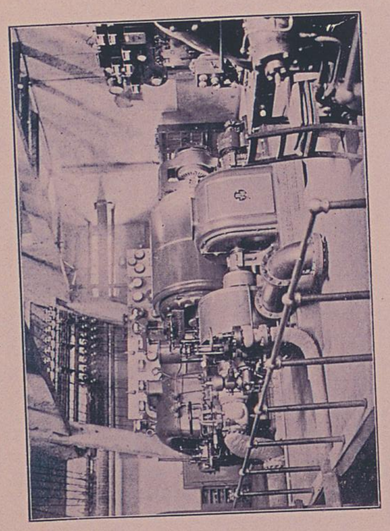
西南より見たる
大泊工場

大泊工場は大泊港の東北の高地に在り、工場より遙に大泊港を望見し得べく、社宅、倶樂部合宿所の如き何れも絶好の地位に在りて遠望殊に佳なり



大泊工場の抄造機

大泊工場には百十八吋フォドリニア式抄造機一基を据付く。寫眞は同機の一部にして仕上カッター方面より見たるものなり



大泊工場の電氣室

大泊工場にては別に電氣部ありて、自家工場用電力を供給する傍ら大泊町及其の附近に電燈及電力を供給す

各工場の概況

大泊工場

一　所在地　樺太大泊郡大泊町

二　開業年月　大正三年十一月

三　工場の規模

用地　十二萬一千八百餘坪

構造　鐵網コンクリート及び一部木造平家二階乃至四階建

建坪　工場及び附屬建物五千七百七十六坪

抄造機　百十八吋　フォドリニア式　一臺

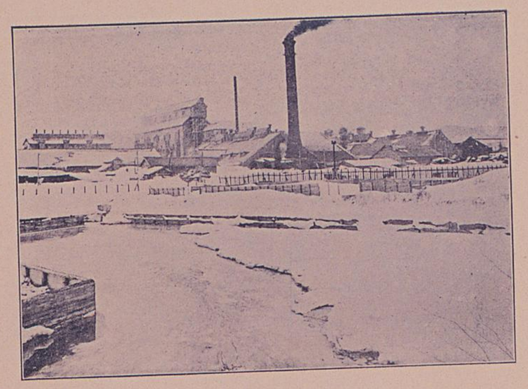
蒸解罐　容量十噸　二基

原動力　電力　二千八十馬力
　　汽力　千八百馬力

四　原料　蝦夷松、椴松等の針葉樹を專用す

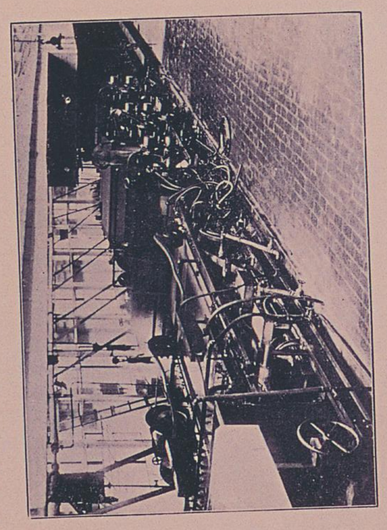
五　製品の種類
　亞硫酸「パルプ」（蒸解紙料）

六　一箇年の生産額　一萬二千噸



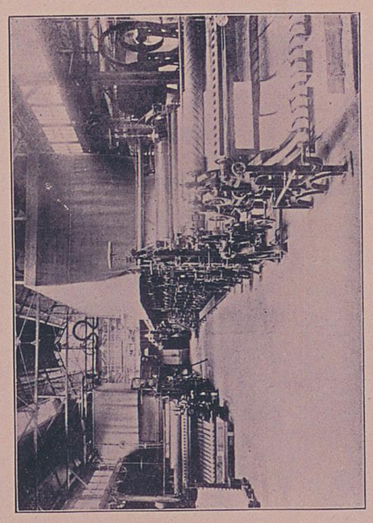
西南より見たる豐原工場

豐原工場は豐原町の郊外に在り、工場附近一帶平野にして工場は豐原町に於ける一偉觀たるを失はず寫眞は冬期に於けを同工場にして西南より見たるものなり



豐原工場第一抄造室

豐原工場には百吋フォドリニア式抄造機二臺百吋シリンダー式一臺を有す、寫眞は第一抄造室にして百吋フォドリニア式抄造機のワイヤーパートなり



豐原工場第二抄造室

豐原工場第二抄造室にして百吋フォドリニア式抄造機一臺百吋シリンダー式一臺を据付く。向つて右はフォドリニア式にして左はシリンダー式抄造機なり

豐原工場

一　所在地　樺太豐原郡豐原町

二　開業年月　大正六年一月

三　工場の規模

用　地　四十一萬八千六百餘坪

構　造　鐵網コンクリート及び一部木造、平家二階乃至四階建

建　坪　工場及び附屬建物九千三百八十八坪

抄造機　百吋　シリンダー式　一臺

百吋　フォドリニア式　二臺

容量　四噸　一基
蒸解罐　同　五噸　二基
同　十噸　一基
同　十一噸　一基

原動力　電力　三千三百五十馬力
汽力　二千九百五十馬力

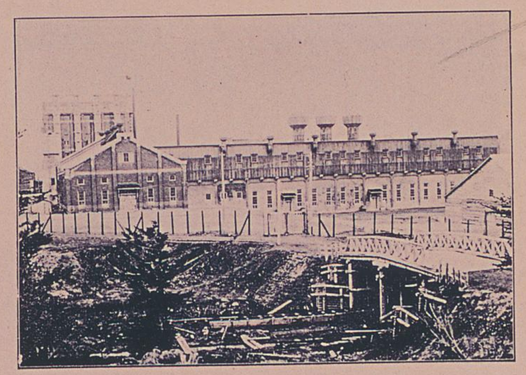
四　原料　蝦夷松、椴松等の針葉樹を專用す

五　製品の類　亞硫酸「パルプ」及び包裝紙

六　一箇年の生産額

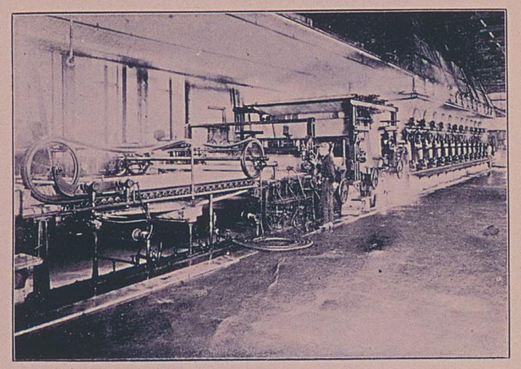
亞硫酸「パルプ」　二萬二千噸
包紙　五百五十萬听、

尙本工場は目下增設工事中にして之れが完成の曉には「パルプ」年産額三萬五千噸となる豫定なり



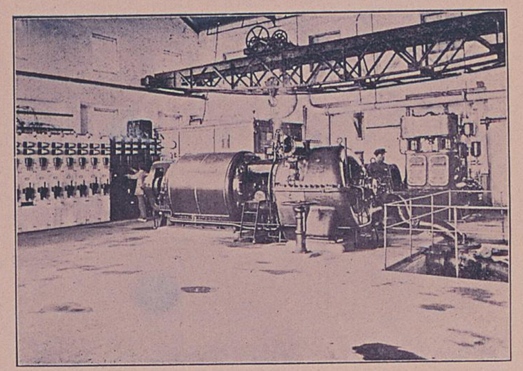
西北より見たる野田工場

野田工場は構太に於ける最新の工場にして設備完全せり、寫眞は西北より見たる同工場にして抄造室製藥室木釜室の外觀なり



野田工場抄造機

野田工場には百十八吋フォドリニア式抄造機一臺を有す、同機は最も優秀なるものにして寫眞はワイヤーパート方面より見たるものなり



野田工場電氣室

野田工場には自家用の發電所を有し千キロワット發電機一臺百五十キロワット一臺を有す、寫眞は千キロの發電機室なり

野田工場

一　所在地　樺太野田郡野田町

二　開業年月　大正十一年二月

三　工場の規模

用地　三十六萬九千六百餘坪

構造　煉瓦造平家二階乃至四階建

建坪　工場及び附屬建物五千八百六十坪

抄造機　百十八吋　フォドリニア式　一臺

蒸解罐　容量　十噸　二基

原動力　電力　一千五百四十馬力

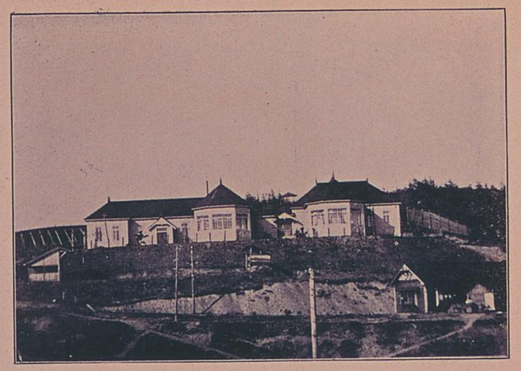
汽力　一千三百馬力

四　原　料　　蝦夷松、椴松等の針葉樹を專用す

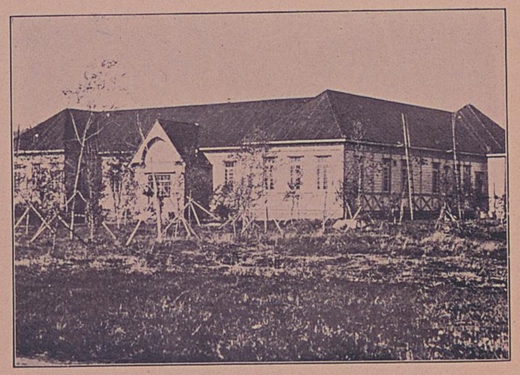
五　製品の種類　亞琉酸「パルプ」

六　一箇年の生産額　一萬五千噸

從業員に對する設備一班

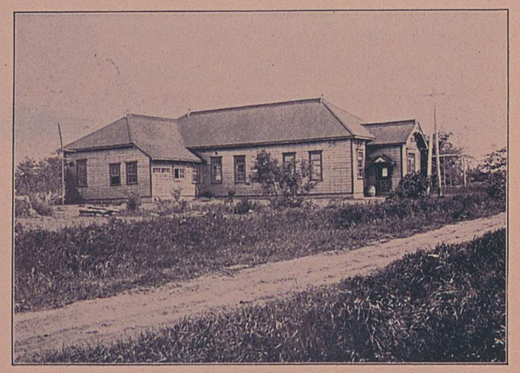


大泊工場職員倶樂部



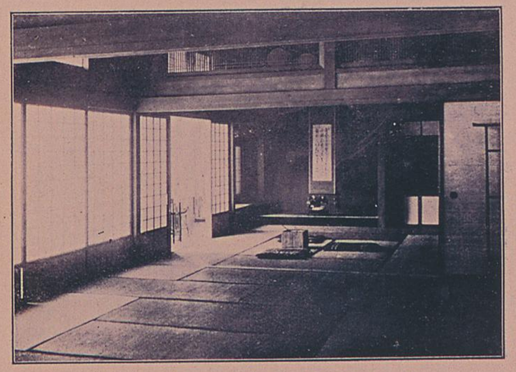
豐原工場職員倶樂部

大泊工場職工倶樂部外觀



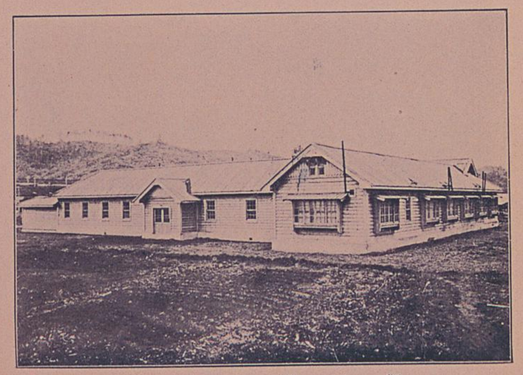
豊原工場職工倶樂部

野田工場職員倶樂部



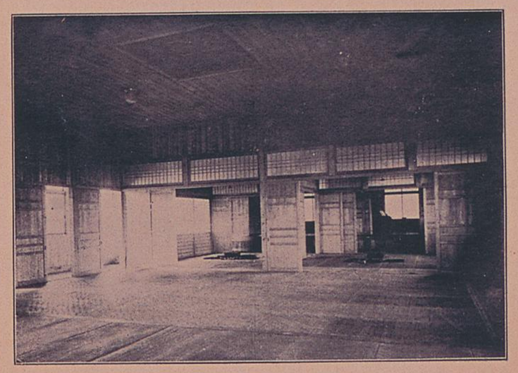
職員倶樂部內日本座敷

消費組合店舗



附屬病院外觀

野田工場職工倶樂部外觀

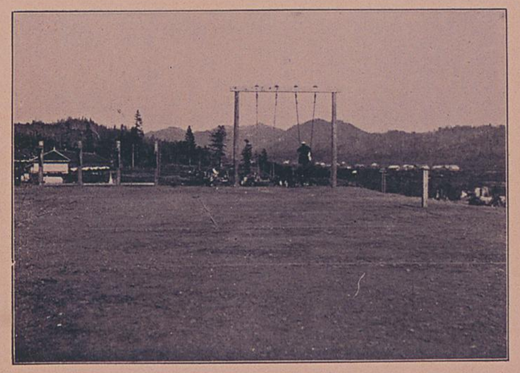


職工倶樂部內娛樂室柔道擊劍場

庭球コート

野球場

附屬病院內部



兒童遊戯場

本社及分社役員

本社及當分社の現任役員左の如し

王子製紙株式會社

專務取締役社長	藤原銀次郎
常務取締役	高島菊次郎
常務取締役	高田直屹
常務取締役	小笠原菊次郎
取締役	大橋新太郎
取締役	有賀長文
取締役	林健

取締役　堀越壽助
取締役　井上憲一
取締役　足立正
取締役　田中治朗
取締役　原鐵三郎
取締役　井上周
監査役　中井三郎兵衛
監査役　西村秀造
監査役　廣瀬彌三郎
監査役　野村德七
監査役　益田信世

樺太分社役員

擔任取締役　田中治朗
主事　櫻井久我治
工務課長　（兼）光澤義男
山林課長　梅澤源吉

大泊工場

工場長　早房長德
工務係長　木下又三郎
會計係長　杉本孝作
庶務係長　杉原利映

王子製紙株式會社

樺太分社案內畢

豐原工場

工場長　光澤義男

工務係長　長澤隆三

會計係長　中村茂樹

庶務係長

野田工場

工場長　打保常次郎

會計係長

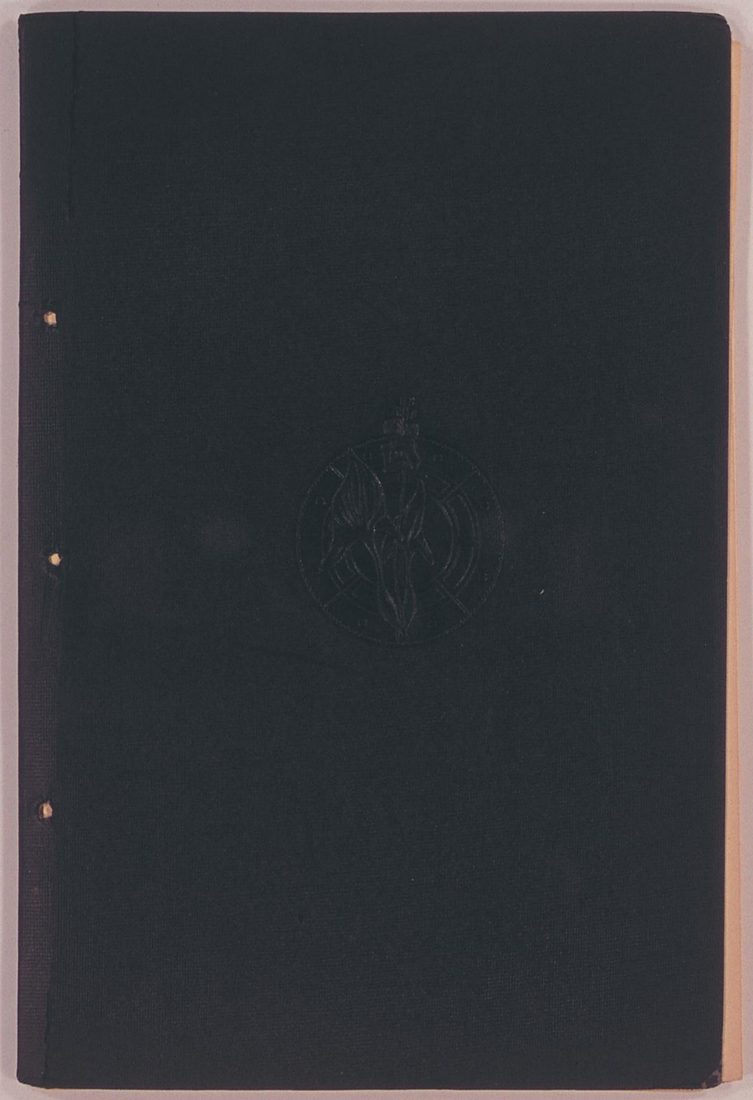
庶務係長　寺田兵治

大正十四年七月十八日印刷
大正十四年七月二十日發行

（非賣品）

編輯兼發行者　坂部武三郎
東京市麴町區永樂町一ノ一
王子製紙株式會社東京出張所

印刷者　矢部三代雄
東京市神田區小川町一番地

印刷所　三松堂印刷所
東京市神田區小川町一番地

印刷工場
駒込五丁目
九番地
倉敷紙株式會社
特製
金屏風
小
王子